

小学校教員養成段階における体育授業観の様態

—短期大学児童教育学科を事例に—

住本 純

キーワード：教員養成、体育授業観、事例研究

1、問題の所在と研究目的

現在、日本の学校教育において、「学び続ける教員」（中央教育審議会，2012）という教職生活全体を通じた教員の成長過程の中で、授業力量を形成し、向上させていくことが求められている。そして、この件に関して先行研究では、教員が持つ授業観や教師観、子ども観といった信念がその成長過程に深く関わっていることが明らかにされてきた（木原，2004；黒羽，1999；吉崎，1991）。また、小学校教員の持つ信念が教員の授業力量の成長発達に関係のあることが指摘されており（小野ら，1995）、教員の有する授業観が目指すべき授業や授業成果を大きく規定することが報告されている（吉崎，1997）。

上記を踏まえ、体育科教育学分野においても、行動主義的な研究への反省などから教員の体育授業に対する「知識」や「信念」の影響も議論されるようになり、知識や信念が教員の授業力量を規定することが指摘されてきた（中井，2010；Zhu et al.，2011）。一方で、教員が有する授業観は、児童、生徒、学生として何万時間と過ごしてきた経験により構築されており、変容が難しいことが指摘されている（秋田，2000）。

これらの指摘から、小学校教員を目指す学生が保持する体育授業観を明らかにすることは、教員養成段階での体育の授業力量を向上させるためにも重要であると考えられる。

実際に嘉数ら（2010）は、教員養成段階の1年生から4年生の学生が保持する「目指す体育授業」としての体育授業観について報告している。また示された体育授業観の学年間の相違についても指摘し、それらに教育実習経験が影響を与えることを示唆している。加えて嘉数ら（2013）は、教育実習前後の体育授業観を質的に分析し、保持する体育授業観が教育実習における授業実践を通して変容していくことを指摘している。他方で、勝亦ら（1979）も1、2、3年生の4月段階と教育実習後の4年生の体育授業観を比較し、その相違について明らかにしている。これら先行研究は、変容が難しいとされる授業観の変容の可能性を示唆するものである。しかしながら体育科教

育学分野では、保健体育教員志望学生を対象としたものであり、体育授業を実施する小学校教員志望学生を対象に体育授業観を明らかにした研究が見当たらない現状である。そのようなことから、小学校教員志望学生を対象に、教育実習前の具体的な体育授業観を調査し、検討していくことは有意義だと考えられる。また第一義的にどのような体育授業観を保持しているかを明らかにするための方法として、先行研究において理科授業観を明らかにした山崎（2007）や先述した嘉数ら（2013）が用いた研究方法を参考に質的に分析していくことで有用な知見を提供できると考えられる。そして、小学校教員志望学生の体育授業観を明らかにすることで、小学校教員免許取得に係る体育科関係の授業科目において、より学生の授業力量向上を意図した講義内容を提供することができると考えられる。また教育実習前の体育授業観を明らかにし、教育実習後の調査を実施することにより、小学校教育実習における体育授業観の変容の可能性を探ることを可能とするだろう。

そこで本研究では、教育実習前の小学校教員志望学生が保持する体育授業観を明らかにすることを目的とした。

2、研究方法

2-1 対象

対象者は、2015年度S短期大学児童教育学科1年生の小学校教員免許取得希望者37名である。教育実習前の学生を対象としているため、1年生を対象とした。

S短期大学児童教育学科では、保育士資格、幼稚園教諭2種免許、小学校教諭2種免許を取得することが可能である。資格・免許取得は卒業要件としていないが、在籍する学生の9割以上は、いずれかの資格・免許を取得し、卒業する。その中で1年生は157名在籍しているが、調査時点で進路希望について、不確定な学生も存在した。そこでデータ収集の時点で、小学校教員免許取得を希望する学生を小学校教員志望学生とし、対象者として選定した。

2-2 データの収集方法

データの収集は、2015年6月22日、2015年9月25日に行った。

山崎（2007）や嘉数ら（2013）を参考にした質問紙を作成し、自由記述式で回答させた。質問項目は、「①あなたが目指す体育授業は、どのようなものですか。その理由も説明してください。」「②その授業について比喻を用いた場合、どのように表現できますか。」「③その比喻を考えた理由を書いてください。」である。

また学生に質問内容の理解を促すために、配布した質問紙に目指す体育授業とそれ

に対する比喩表現を例示した。

2-3 データの分析方法

対象者の体育授業観を明らかにするために、文書化したデータに対して KJ 法（川喜田，1967）を用いて分析した。

KJ 法は、帰納的に概念や仮説を生成していく分析方法である。この方法では、まず対象者の自由記述などの特定事象を別の事象を分類していく。このような分類から暫定的な概念を生成していき、更にその他の事象とも分類を進め、サブカテゴリーからカテゴリーを引き出していく。このような分析作業を繰り返し行った。分類の対象は質問項目①とし、比喩表現やその説明の質問項目②③は、体育授業観を分類するための解釈の参考に用いた。

この手法に基づき本研究の分析では、質的データを対象とするため、量的研究との研究過程の相違などから信頼性と妥当性を高めるために異なる手続きが必要になる（大川ら，2002）。また質的研究の「解釈における分析では、数量的分析のようにデータを数量化し、結果の再現性を保証することで客観性を支える方法を取らない」（藤江，2007）ので、信頼性と妥当性の確保が重要になる。そのため、第 1 に分析過程において、調査者と小学校教員 2 名（教職歴 35 年目の指導教諭、教職歴 8 年目）の計 3 名で 3 回協議を重ね、分類（平成 27 年 9 月、10 月、11 月）を行った（peer examination）（メリアム，2004）。1、2 回目の分析は、3 名合同で分類を行った。分析者間の意見が一致するまで協議を重ね、2 回目でサブカテゴリーからカテゴリーを生成し、カテゴリー一名も決定した。3 回目は、各分析者それぞれで分類を行い、分析者間の分類一致率が 90% 以上であったことにより、分析を終了とした。同時に分類が一致しなかったデータについては、各分析者が分類した基準を説明し、3 名の意見が統一するように協議を加え、分類した。

3、結果と考察

分析結果から、生成された小学校教員養成段階の学生が保持している体育授業観のサブカテゴリーとカテゴリーに該当する記述をした人数と全体における割合を表 1 に示した。またサブカテゴリー I における具体例と比喩表現を表 2 に示した。

表 1. 体育授業観のサブカテゴリーとカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー II	サブカテゴリー I	I	II	III
体育授業の目標に関すること	技能を向上させる授業	達成感や成功体験を得ることができる授業	2	2	8 (21.6%)
	認知面を形成する授業	技能の向上に必要な知識を学べる授業	1	1	
	態度面を形成する授業	仲間との協調性を身につけられる授業 技能や体力の向上だけでなく、友だちと認め合うことのできる授業	4 1	5	
体育授業の情意面に関すること	子ども全員が楽しめる授業	楽しいと思える授業	13	23	25 (67.6%)
		運動の苦手な子どもでも楽しめる授業	4		
		運動の得意な子どもも苦手な子どもも楽しめる授業	6		
	子どもの関心意欲が高い授業	子どもが主体的に動いている授業 子どもが積極的に参加している授業	1 1	2	
体育授業の安全面に関すること		安全面を考えた授業	4		4 (10.8%)
合計			37		

表 1 のサブカテゴリー I から、「技能を向上させる授業」、「認知面を形成する授業」、「態度面を形成する授業」、「子ども全員が楽しめる授業」、「子どもの関心意欲が高い授業」というサブカテゴリー II が生成された。それらの結果から、カテゴリーとして「体育授業の目標に関すること」、「体育授業の情意面に関すること」が位置づいた。サブカテゴリー I で生成された「安全面を考えた授業」は、他のサブカテゴリーと統合されず、独立したカテゴリーとして位置づけられた。その上で、カテゴリー名として「体育授業の安全面に関すること」とした。

「体育授業の目標に関すること」は、「技能を向上させる授業」は技能、「認知面を形成する授業」は思考判断、「態度面を形成する授業」は態度というように、現行の学習指導要領の目標項目と対応する結果となった。この点は、保健体育科教員養成段階の学生を対象に調査した研究でも、体育授業で何を身につけさせたいかという「技能」・「知識」・「態度」に関する具体的な考えを含んでいるのが特徴と指摘されている（嘉数ら，2013）。そのような事から、小学校教員養成段階の学生にも、体育授業で児童に何を身につけさせたいのかという具体的な授業目標を体育授業観に含んでいると同様のことがいえるだろう。

表 2. カテゴリー I に対応した記述例と比喩例

カテゴリー I	記述例	比喩
達成感や成功体験を得ることができる授業	<ul style="list-style-type: none"> 成功体験がたくさんできる授業 運動するで充実感、達成感を得られることを分からせる授業 	<ul style="list-style-type: none"> アンパンマンのような 長距離
技能の向上に必要な知識を学べる授業	<ul style="list-style-type: none"> 楽しくて、瞬発力や持久力を身につけるためにはどうすればいいかわかる授業 	<ul style="list-style-type: none"> アスレチックのような
仲間との協調性を身につけられる授業	<ul style="list-style-type: none"> 周りの友だちと仲良くなれるような授業 友だちと一緒に協力して、頑張れる授業 	<ul style="list-style-type: none"> コンサートのような ハリーポッターのような
技能や体力の向上だけでなく、友だちと認め合うことのできる授業	<ul style="list-style-type: none"> 技術や体力の力がついただけじゃなく、協力することや人の良いところをみれるようにさせるような楽しい授業 	<ul style="list-style-type: none"> 休み時間のよう
楽しいと思える授業	<ul style="list-style-type: none"> 楽しく学べる授業 子どもが思いっきり楽しんでいる授業 	<ul style="list-style-type: none"> 遊園地のような カッパえびせんを食べているような
運動の苦手な子どもでも楽しめる授業	<ul style="list-style-type: none"> 運動が苦手な子どもが鍵を握る体育 運動に対する苦手意識が薄れていく授業 	<ul style="list-style-type: none"> チームスポーツ 料理上手なお母さん
運動の得意な子どもも苦手な子どもも楽しめる授業	<ul style="list-style-type: none"> 運動の得意な子どもも苦手な子どもも積極的に参加できる授業 運動が苦手な子どもも得意な子どもも楽しめる授業 	<ul style="list-style-type: none"> お子様ランチ おもちゃ屋さんのような
子どもが主体的に動いている授業	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが主役になるような授業 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動のような
子どもが積極的に参加している授業	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが積極的に参加している授業 	<ul style="list-style-type: none"> テーマパークのような
安全面を考えた授業	<ul style="list-style-type: none"> ケガをさせない授業 子どもが楽しみ、なおかつ安全を考えた運動を教えられる授業 	<ul style="list-style-type: none"> 保冷剤のような お母さんのキャラ弁

加えて、「体育授業の目標に関すること」に分類した記述の比喩表現（表 2）では、「アンパンマン」、「アスレチック」、「コンサートのよう」と表されていた。例えば、「コンサートのよう」との比喩を考えた理由では、「授業前はワクワクして、授業中は楽しくて、授業後に友だちとの協調性とか何かを学べるような授業にしていきたい

から」と記述していた。この例のように「体育授業の目標に関すること」の Kategorii に分類された学生の記述は、体育授業を受ける子どもたちが楽しいと思うことの上に、授業で学ぶことが必要だという認識に立っていることが読み取れるだろう。

次に「体育授業の情意面に関すること」は、「子ども全員が楽しめる授業」、「子どもの関心意欲が高い授業」から形成されている。「子ども全員が楽しめる授業」は、運動が好きな子どもだけではなく、苦手な子どもも一緒に楽しめる授業を目指していきたいという考えである。また「子どもの関心意欲が高い授業」は、授業中に教師にやらされるのではなく、子ども自身が積極的に主体的に取り組んでいけるような授業を目指していきたいという考えである。記述された比喩表現（表 2）では、「おもちゃ屋さんのような」「料理上手なお母さん」、「かっぱえびせんを食べているような」等が挙げられた。理由としては、「料理上手なお母さんは、好きなもの嫌いなもの関係なく、おいしく料理するから。運動の苦手な子・好きな子に関わらず楽しめる授業がいい」、「一回はまると、なかなか止めれなくなりそうな楽しい授業にしたい」と記述されていた。記述された比喩表現やその理由から、実際の授業で子どもたち全員が楽しく主体的に取り組んでいける雰囲気や子どもたちの意識といった内面に焦点を当てていることが考えられる。

上記のように形成された「体育授業の情意面に関すること」の Kategorii においても、先述した「体育授業の目標に関すること」の Kategorii と同様に、嘉数ら（2013）の先行研究において指摘されている。嘉数ら（2013）は「体育授業における生徒の雰囲気」として、全員の生徒が楽しむことや積極的に活動することなどの考えを含んでいることを体育授業観の特徴と指摘した。この点から、この特徴が小学校教員養成段階の学生においても、体育を専門とする保健体育教員養成段階の学生と共通した体育授業観を保持していることが示されたといえるだろう。

しかし本研究では、嘉数ら（2013）の先行研究との相違点も見られた。それは Kategorii として、「体育授業の安全面に関すること」が形成されたことである。この Kategorii は、体育授業を行うにあたって、怪我を予防するといった観点にたった考えである。グラウンド・体育館設備等の物的側面やどのように安全に指導していくかという人的側面に対する記述がみられた。その例として、比喩表現とその理由をあげていくこととする。比喩表現として、「保冷剤のような」、「お母さんのキャラ弁のような」が挙げられた。理由としては、「おいしいものでも、くさってしまったら食べれない。その運動が楽しくても、ケガをしたら怖くなるから。ケガをしないような授業がいい。」「お母さんのお弁当は安心して食べれるから。」と記述されていた。この点は、児童教育学科における小学校教員養成段階の学生特有の指摘といえるだろう。なぜなら調査対象となった児童教育学科では、小学校教諭免許をはじめ、幼稚園教諭免許や保育士

資格も取得できる。資格・免許取得に係る必修単位が重複している科目が多い。そこで、乳幼児期での安全教育や安全管理について学ぶ機会が多くあり、子どもたちに対する安全配慮に対する意識が高まっていると考えられるからである。加えて、乳幼児期や児童期の子どもたちはまだまだ体が未発達であり、重大事故に陥りやすいといわれている（日本保育協会，2014）。そのような事からも、保育士・教師や保護者の怪我や病気の予防に対する意識が高いことも挙げられる。また昨今取り上げられるメディア情報の影響もあるだろう。調査を行った時期（6月・9月）は、運動会シーズンということもあり、組体操や体育授業での怪我や学校での安全管理の問題が大きくニュースでも取り上げられていた。このような背景から、安全意識が高まり、体育授業観として含まれた可能性も否定できない。

さらに現職の保健体育教師を対象に授業観の変容を検討した朝倉(2014)の研究において、教師になる前の経験から、保健体育教師の授業観の中に「規律・態度志向」と「運動量・安全志向」の存在を明らかにしている。このような先行研究からも、学生自身の体育授業を受けてきた体験や免許取得に係る学びの経験から、安全面に関することが授業観に含まれていったことと考えられる。そして、この授業観は、グラウンドや体育館で実際に体を動かし、運動するといった教科である体育科特有の授業観として解釈できる。

他方で、体育授業観のサブカテゴリーとカテゴリーに該当する記述をした人数の全体における割合（表1）をみると、「体育授業の目標に関すること」は約22%、「体育授業の情意面に関すること」は約68%、「体育授業の安全面に関すること」は約11%となった。体育授業の情意面を重視した記述が約7割占めた理由は、2点考えられる。1点目は、まだ大学に入学してから1年も経過しておらず、体育科教育法も未履修であるので、具体的な目標論や指導論についての知識が不十分なことが考えられる。2点目は、教育実習について未経験という点が挙げられる。なぜなら、教育実習経験において、「授業の具体的な手立てを含めた考えへの変化が認められる」（嘉数ら，2013）との指摘があるように、教育実習経験が学生の体育授業観をより具体的な目標論や指導論にしていくことは先行研究でも多く示唆されているからである。（Tsangaridou, 2008；嘉数ら，2013）。

上記の点を踏まえると、短期大学小学校教員養成課程の学生であっても教育実習前では、「楽しい体育授業」といった抽象的な体育授業観を多くの学生が記述することが指摘できる。加えて、この対象学生らが教育実習を経ることにより、「楽しい体育授業」を実践するための具体的な目標や指導方法を記述するか否かを検証することが求められる。

4、結論と今後の課題

本研究では、短期大学小学校教員養成課程の学生が保持する体育授業観の様態を明らかにすることを目的とした。その結果は以下の通りである。

まず体育授業観としては、大きく3つの考えに分けることができた。それは、「体育授業の目標に関すること」、「体育授業の情意面に関すること」、「体育授業の安全面に関すること」であった。「体育授業の目標に関すること」、「体育授業の情意面に関すること」については、嘉数ら（2013）の先行研究と比較することで、体育を専門とする保健体育教員養成段階の学生と共通した特徴を持つ体育授業観を保持していることが示唆された。一方で、「体育授業の安全面に関すること」については、これまでの保健体育教員養成段階の学生を対象とした先行研究では指摘されておらず、短期大学児童教育学科における小学校教員養成の学生の特徴として示すことができた。

しかしながら、抽象的な体育授業観を示している学生が約7割を示す中で、そのまま変容をすることなく、教員免許を取得し、教員として入職していくのか。教員免許取得過程の中で変容していくのか。それとも嘉数ら（2013）やTsangaridou（2008）の先行研究が示すように、教育実習経験が体育授業観に影響をもたらし、変容するのかが課題として残された。その課題を検討するためには、継続的に教育実習前と教育実習後に、本研究と同様の質問紙調査を行う必要があるだろう。加えて、対象者を選定し、個別事例としてインタビュー調査を並行して実施することにより、詳細な変容過程を追うことを可能とするだろう。

<引用・参考文献>

秋田喜代美（2000）教師の信念．日本教育工学会編，教育工学辞典．実教出版：東京，pp. 194-197.

朝倉雅史（2015）体育教師の成長と学びに関する研究－信念と経験の相互影響関係に着目して－．筑波大学博士論文要約．

<file:///C:/Users/2155003/Downloads/B2745.pdf>（2016年1月28日）

中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）．文部科学省．

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（参照日 2015年12月5日）

藤江康彦（2007）教育・学習研究における質的研究の留意点．秋田喜代美・能智正博監，はじめての質的研究法 教育・学習編．東京図書：東京，pp. 21-45.

保育士としての事故予防に関する調査研究報告書

http://www.nippo.or.jp/research/2014.html#h26_c (2016年1月21日)

- 嘉数健吾・岩田昌太郎 (2010) 教員養成段階における体育授業観に関する事例的研究. 日本スポーツ教育学会第30回国際大会記念論集: 139-145.
- 嘉数健吾・岩田昌太郎 (2013) 教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究—教育実習前後に着目して—. 体育科教育学研究, 29 (1): 35-47.
- 勝亦紘一・高橋亮三 (1979) 教育実習に関する調査研究—体育科実習を通しての授業観の変容—. 順天堂大学保健体育紀要 22: 16-27.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法. 中央公論新社: 東京.
- 木原俊行 (2004) 授業研究と教師の成長. 日本文教出版: 東京.
- 黒羽正見 (1999) 教師の授業実践観に関する事例研究—公立S小学校の校内研修対象のエスノグラフィ—を通して—. カリキュラム研究, 8: 73-86.
- メリアム: 堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディー. ミネルヴァ書房: 京都.
- 中井隆司 (2010) 体育授業で求められる教師の能力. 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著, 新版体育科教育学入門. 大修館書店: 東京, pp. 251-262.
- 小野由美子・小野擴男 (1995) 教師の授業実践力量に及ぼす学校組織特性および教育信念の影響. 教育実践研究指導センター研究紀要, 4, 33-44.
- Tsangaridou, N (2008) Trainee primary teacher's beliefs and practices about physical education during student teaching. *Physical Education and Sport Pedagogy*, 13 (2): 131-152.
- X, Zhu., C. D. Ennis and A. Chen (2011) Implementation challenges for a constructivist physical education curriculum. *Physical Education and Sport Pedagogy*, 16 (1): 83-99.
- 山崎敬人 (2007) 理科教師の専門的力量の向上を目指した教師教育の改善に関する研究 (課題番号 15500592). 平成15年度～平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書.
- 吉崎静夫 (1991) 教師の意思決定と授業研究. ぎょうせい: 東京, pp. 123-155.
- 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師・アクターとしての教師. 金子書房: 東京.